丹鶴叢書

草根集 十

093.1
2006
佛教大学図書館
2005494844

草根集第十

享徳元年正月朔日試毫

春神祇　久しかの神世のまゝふまの神ぬさとみてゝ雪むすぶ

春釈教　梅ゝそよかつゝゝ初くさも本も市ぬの花の匂ゝ

春祝言　をきまとしいはゝ中ゝ立つ千ゝあるしき市代の雪

五日武田大膳大夫信賢家ゝ遣ゝ中ゝ

初春鶯　ぬるもゝ雪を雪の古巣やまゝ鶯のあゝるうん

逢恋　ゝ歌ゝつゝゝくはせの山ゝかゝもくかゝよ衣ゝ乃ゝ

夕雨　うかせゝる夕の雲ハ風ゝゝゝ木の下もゝ古ての雨

六日畠山修理大夫入道賢良の家ゝ遣ゝ

内閣文庫

内閣文庫

都霞　百姓やもすがらたき物のよりに烟も霞まるらむ

寄枕恋　人もとへ流る涙の淵まろ枕ふ浮る夢ぢ[illegible]

山家燈　いと里ふなる丘ぬ星と人のこん木のまの尾の宮の灯

十百将軍家よ[illegible]ふ為君出させ[illegible]

詩なるかきくと作らしまくまねるを次ふ

一そ[illegible]みく出くとうけ[illegible]をまとけ

ふく筆ままの形ばしる

まれ[illegible]みけをあ[illegible]抜むのまもがやのくん

同日三宝院准后一賢御会始

初春祝　むきひと[illegible]ふ[illegible]ぬ[illegible]む法の為水

十三日或所よく読ぶあるしてよ

早春　いまとふまの義の右ふ中まあしに[illegible]

原雉　[illegible]

厭恋　[illegible]

古寺　初[illegible]の衣ハかよ七十ふ形二りのまさのよりむる

十四日小三原伺ぶ入道浄元明栄寺と寺まく

月次のこせしまして

立春　[illegible]

夏草　[illegible]

蕨風　[illegible]

逢恋　我ゐる琴みるるおの音をまつ恋ふるこゝろ嬉しき

眺望　後代のこゝろの色はいとの色紅葉ふる雨はらら松

十七日淀川右馬佐義信家よりくとみおみて小

早春　早苗とる雲の下の空はるかなるもとる乃山川

帰雁　ひとの雨の信濃の雁の雁の羽風そそる

寄日恋　夕暮ふ松の風やうかまゝもきるのんくくて

古郷　あそ星ぬむしそ物もちてこなるのもう武蔵のふとハ

十いる大猪大夫の家乃月次もゝめふ

柳解春色　もゝるあ山松もまゆをひくくて門をさして空の色よて水ハ

湖帰雁　乃うゐゝもの法の信濃めく海をてさぬ鳴乃うら信

時雨晴　見そ山ふこ行ものハ

寄苔恋　埋もむ苔の下道松絶くこそ信ハあり古まつの風

鶏告暁　やてるなく木のもの月ふこもこ山ゆつけるなをこのこを

廿日草庵の月次ゝ

閑中春朝　もちろんてもてもなき新ふ空もつゝ信空もこそ

立春霞　山のものく新ハこえぬやもこそ山ふよしあるる高ぬん

夕立風　ゆ乃ゝみ空の乃くもまれりの山せたし夕たちの色

寄風恋　のもるる山なもたなのおく庵のちゝ風ハ信色

川　水のあこ清のるこたをやゝ色ひ絶をぬあ信川信

廿二日修理大夫の家の月次ゝ

待早鶯　梅ふきちつ枝さ枝も花おそ〳〵鶯さそ〳〵ふのうぐ類
當坐霞　ふるさと霞のあさの浦人のうぐとしもあきまを日をそこる
早涼至　身ふるる袖そなるとも音ふ袖の日影とそふ秋風
旅泊夢覺　おもせはさそ〳〵ふの枕ふくまさうりむ〳〵おくの夢
廿四日細川右京大夫勝元の家の月次ふ
毎山有春　民のゐ袖せ〳〵ふ世ふおそ〳〵ふるふなきちの霞ハ類
當坐初春霞　ふ世の春をそてみるやゑをき松ゆ〳〵霞めん
寄顔恋　ぬるうちの涙の水のうき身や枕ふてそさそふん
浦鶴　おるゑのゆのふ翔しき鶴そいそまの浦の名なき
廿七日右京亮佐大光明寺ふく月次始ふ
寄花

春色浮水　ふ涙きせの緑とうかくもあのくふまちやあの山ふる
當坐野　鶯　鶯やかくそおるうん霞むの小春ふ山ふこの名の乱ふ
寄遊女恋　ふれ松ふきたる毎の契ふきて名をはぬ日まあ
暁述懐　ふる袖るうちなきとふ世ハ名の月ハ青の山のそ
二月廿日三井寺へまうでくる所ふ
初　春　山の名のふ世の坂をふ袖ふ山まふ霞むまちの名
江上霞　まの浦入江のちの花をふ引袖ふ山ふ霞なるらむ類
遠　梅　秋宿ふ袖ふ山ふ梅ふ色をふ袖ふ風ふ世ふ人
梅　白　ふ袖ふ山ふの小陸の袖風ふも白とちふ花その梅
柳　ふ名のふ川の川ふの清ふ初ふの柳の名みふ清ふ

春恋　[illegible]

鞆恋　[illegible]

逢恋　[illegible]

寄鐘恋　[illegible]

関路　[illegible]

山家嵐　[illegible]

旅宿曙　[illegible]

湖

十一日修理大夫の家乃月次

霞障山　[illegible]

牧春駒　草もまだ古葉のままなれども駒の毛さへ栗毛の色

海邊雲　浦ごとに延のみるめや友なるん棹さかて伸のまこと

霞障行舟　行舟のこもの[illegible]清くむろの一本そかたそ[illegible]

寄月恋　[illegible]

鐘声何方　[illegible]

十四日の夜の月次

霞中鳥　[illegible]

雨催花　[illegible]

和詞恋　[illegible]

詹　梅　梅[illegible]

忌後世坊　秋の寐覚むかしの床の涙にもくもれる月はいかゞ見るらん

小篠　いとゞしや庭の小篠の風の音に風もやどらで夜さむなるらん

十七日細川上総介氏久家にて月次始に

梅有佳色　咲そめし木ゞの梢もしらぬまにやどり(やと奕)にほはむ梅の初花

(當坐)遠山霞薄　此頃は霞める山の松杉もおぼろにみえて雪ぞのこれる(玄奕)

寄原恋　秋風のふきにけるより荻原も契し宵の露のかごとに

浦松　遥の浦もくやかくれん浪にちる松のみどりに浦風ぞ吹

十八日修理大夫の家にて聖廟法楽百首中に

連峰霞　雪消し嶺のかすみたつらしも春の来る紀路の遠山(や奕)

蚊遣火　高嶺よりおろす嵐にたつる蚊遣火の夕暮かくる小篠の里(宿奕)

子祐

野月　月も又雲まちかねの野はおそく露の下草

岡雪　雪積る松の葉を埋めたる高岡の霞の松のけ

寐覚恋　さそへやまん覚めぬ夢ぢの寐覚には眠まぬ恨を

村眺望　打出て見る是を名に大和路や里ももろこしも霧の内

神祇　百敷は神のまもりの宮ふかく乃ちもてそ是

廿日右京大夫の家の月次に

梅薫　春霞たちそめし此の里は如何に梅の匂ふなる

槩恋　玉ほこの道行人の袖の香をあはれと思ふ世やうらみの数まさるらん

関鶏(路聞奕)　秋やまさる関のかくさんあふ坂の関の扉をかくるの鳥の音

廿一日草庵にて人々来りてよみ侍りしに

関路霞　ふるまのんのうしもあつ坂の関ちまさしくあむ山ゝ
採早苗　ぬまこゝろ家のあさてのむたきさ月とかてる苗とる
月似鏡　秋をゝゝむ山ゝまりさくまかて光の影ぬ月の影ハ
見増恋　花のゝも山ぬまよりぬをとゝて山ゝさかる社のもゝ西
窓前竹　共竹のゝ千ちかゝ家のとふ小枝切をてむゝ山系

廿二日草庵の月次ゝ

落梅香　梅のむちゝ山ゝ旬ゝあきゝ風君るあゝもみゝぬ家ふ
春月出　むゝ家ふをゝ時ゝゆく月ふみ世のもてきやをる
恨身恋　ゝるゝ多をゝ島のむゝけちゝくあけ秋のゝハ
當坐落花埋路　夕嵐あゝゝ山ゝ花なをゝむゝの道ゝつむらを

餘寒霜　くハをてむゝぬきおく衣をも又きちきの家の影風
山家恋　恋をゝゝ峰の宿の山ゝ山ゝのゝ山ゝのおゝの系
名所濱　打ふゝ萩の葉ふる松ふよ牧浦年あゝ濱風

廿三日大光明寺の月次ゝ

月前梅　いゝあゝ梅の旬ゝをふ志めて家ゝをを海る月影
園春草　若竹の花濱をの祇園もをるもゝあをゝふゆゝ
適逢恋　いつゝ又のゝハまちゝん山ゝやるさゝ山ゝるふめくる月日と
當坐連峰霞　濱ゝ山ゝ家のゝをふかをゝ山ゝくゝる秋のをのかをを
寂覚恋　ぬをを秋濱のほのゝ秋をふ桃ならゝるさゝの西影
海邊松　ゝゝゝやむゝハ岸の松ゝ秋を打ゝん浦のをゝきゝ濱

廿六日三井寺五智院甚美草庵にまゐりて小
鶴若丸といふ小児のもてなしまことに清らかなり
朝翫花　山路の狭き旬の花の枝を折かざすにかくもむ
適逢恋　よひよひに使ひ来めるなかさにあひる夏をつくしもふき
遠村竹　白雲の烟行もとまりあり八里とも
廿七日赤松刑部大輔教貞の家まく清らかなり
春風解氷　流れ小川の水を越きてもいまる花ふまちの川の世
憑誓恋　流れし底のうるめたのまく人のちひの流あとをて
山遠望　流てうらまうまうのうるる舟路の西の沖つまこ山
廿九日宮道親忠八幡法楽にくもめ中小

初春天　神代も霞むしもすめる天の原ちの雪けの坂を流れる
欲春暮　ふるもとの花のう鳥のおもの内ふあまの日新のもの限を
寄桂恋　をもをもの月の桂の花の枝八世をようつるんあるも
寄夢恋　ぬる夢ふみものあをふもをさよを折て時に宿り新も
嶺上松　八幡山ふるをおの時松うもれる嶺の松う世
晦日平頼資もとめ清らかに
早春海　竹をうるもまもつまもの色の春ふをを霞める
寄鶴恋　嘴もの白ひ毛の併を雲の弱のもひくをもく
旅泊鳥　汐さゐよかもめる三湊舟月まもなく鳴ぬ松を

三月四日右京大夫家の月次に

古寺花　さ埋むかつその程京思ひの称、花よ緑もさゆる山の寺

花梢　咲しもあれ落る梢の花をちる夜の月のつきなる称かな

花色　紅の色の深きに咲にほひて花の袖しかさへ日影のちよ

花漸稀　夜ぬるん咲を移しものふくよへてやまるおもひのけ　まともえん类

五日 従四位大夫の家の月次よ

海邊春曙　霞ちかくおきつちる波を風よ匂をぬるものまきの浦かな

花下送日　あま日まくを送りしもんもの花日数つまるふもまちのちよ　乙类　ろ类一本

時々見花　つまあさの侍ものくせ三日月の日まて又うる夜の雲

社頭花（當坐）　ぬきさもし宮まる神のまち坂を花よ桜つきの山かせ

花錦　またちくぬるもの緑木子つまてたつまもまちもさらもなな

手稽

花白　紅よ白ふつらてみし菊のきよあさくかきもなくさく

六日 上総介家の月次よ

河新柳（二月分）　漆河もくて舟や流よさくかきある涛しま柳の糸

二月餘寒　さえくつる宮の桜も宮をいるみやさ咲ぬる二月のも　乙类

寄関恋（當坐）　人もさみ我もぬよあつてなくちてえんとすらん坂の関

花枝　風ゆるく日いもまくく咲もの枝もたつらふ匂ふ吹ふ

花根　おつきく八もまを急くるも家しまる花もものの根よ海かん

惜花　風よちる花をて一日よ惜つまるをまれくぬる月八よおく

十六日 細川右馬頭入道及の家の庭桜さかりなるを

とく一座よりよ

夕　花　春海の夕陽のいろもしるき花の面の中
春思　くるるとも（類）なほ春ハみそらにかゝる霞のうの延あく縄
春釈教　仏をしみ咲るものなりてやりのさとりの教なるらん
十号明常寺の月次
月前落花　ちるまの月の桂の花ちる霞のさとに嵐ふらし
夕蛙声出　夕ハのやあるゝ清ゝ水のうまつ出まの花ゝ
船中夢覚　大船やゆるのたゆ（の類）ふ浪のとまるのうきみる乱ひて
曙（當坐）　花　弱水の鳥のさへるゝなゝ代世も似ぬものゆゝ
春尋恋　ゝぬるゝ霞ゝまハ形あてて伊まゝふ花のやまさと
春田家　風寒しまゝ初ものゝゝて如ハ氷堤むものあゝ小田

廿日石橋　たまつ佐祐義山荘嵯峨小倉山のふもとゝ
西行上人あゝ橋のゝ詠ゝ花座ゝあるハなゝ古人
まゝゝゝみ一半一四十ゝまゝもなゝとめゝん乙ゝ木ハ風
ふゝゝゝくまゝゝゝ木のやうにむゝゝゝゝゝゝゝ二ゝ木ゝ
一日詠ゝ仏ゝ伊ゝゝ歌をさゝゝゝ
山中櫻　ちゝゝふ吹ゝぬ嵐のゝ橋ゝのゝゝ花のいろゝ
水郷櫻　ゝ世の吹ゝゝなゝてゝゝゝ咲やゝゝの里のゝゝ
杉間櫻　ふゝゝ杉の尾ものゝ橋ゝ新伊ゝあゝ山の宮の月
廿一日大原ゝ里の花ゝ盛ゝなゝぬゝて修理大
夫入道ゝゝゝゝ仏ゝ歌を和ゝゝて出て西京

くさ法華寺より庭の花をとふ侍りしよろこびより雨
ふりしかども先宗寺まゐまゐしに真観音寺まで
むかしたづねの高勝院の山庭ある海京寺とも
またあは花のをしまるまではあともなくいはへとくし
侍りし事はいはせまでく後鹿経法の時なるに
え侍りし真保坊とわ僧を尋しに花僧にゆく
みしはもあらはすまじの事なくかゝると出でくあ
もとに侍りし跡をふて遊に入て雨あちこち
花をみあつまりし吉峰より宿舎に帰りたまりし
つとめて花見にさそはれ大谷に暫しやすみて

子祐

さくらとみえしもちらば雨中にこそまさりけれ
く遠方の中に（侍し一本）

寄雲花　待出る日の川上の峰さくら出雲かとや花乃八重雲
寄錦花　さくら咲花の錦をおりかけて入江の水の露のまの波
寄花別恋　人をうき花の別はいるるのやどるはぬ宿の春風
寄花眺望　高砂の尾上もとの木の間をとをみれば世八千里まで霞むなるの縁（く一本类）

さくらまき修理大夫の家にて庭の花盛なりけるに
一首あつまりしに

尋花　ものゝふの袖に匂ふを尋ねてぞ霞まよふもとの木の下
花留客　やどりの花のこゝのまるのかたみに旅をたつさき松風の音

花散春閑　山の辺に桜の花の散ぬれば春の日ぐらしもの憂かりけり

廿四日小雨降る　廿五日清浄光院殿へ参る　廿六日湯山へ

行く道の間見むつる事しるし

水の川のくまくまに山せるものみなさきそめて

あまくだる所を体に

そまがや浦なるあまのうるめ干す花の咲ちる山桜

其里にきふまいりて昔結因法師住る小

身まるる時日はるみしおくもちる和歌の紙

なををまくく埋まるとて四面に塚のあるしん

まの湯に入て次に寄みしなく問ものもとも

そまにてふまくにそまにてあるの行垣なるしる所小

ちひさくあるを結因の家の座なる一しくもを流に

竜宮結びくく人住なるを

むしく回るる堀むかつふ杉のそを打そ枯

あくる川をそるとて

ちるかるゆきまくくぬをよ速に除きまの川波

澎のそやふ一あまくに住るみそしあるれきくまく

ろまきそ

ゆるまくをそをはいん丹あくぬ接ゆもくに歌るを世川波

なまを世川を武庫山のゆるくまとはむく川をまるを

[illegible]

舟はゝ[illegible]を越て七うち[illegible]本ノ湯山[illegible]

[illegible]

三月[illegible]なる日とて[illegible]

早春山　[illegible]

深夜梅　[illegible]

松上藤　[illegible]

橘知昔　[illegible]小奚

外山月　[illegible]

歳暮　[illegible]

立名恋　[illegible]

蕭寺鐘　[illegible]

如月七日徒然の餘四人百[illegible]　浄元　正慶　正般　愚身

初春霞　[illegible]

門柳　[illegible]

故郷春月　[illegible]

見花　[illegible]

惜花　[illegible]

三月盡　[illegible]と奚

五月郭公　[illegible]

夏草露　たつたしおる夏草を露おもたく結ぶ草葉ふたへぬ露ぞ
遠夕立　山の杜の一むらを消くまもなき日影のなかをゆふ立
初秋風　くもりなし雨後の秋しおきちかの松をおろる杜の初風
秋夕　ひとつのうきのさとをまもりん地ふる杜の秋ぞ
山初鳥　越くなる下の深のかつをなくや杜のこゑ
谷月　をちかたの杜はそもとちかの方をのおよその月の影
湖月　をちかの浦や影のおををををををる杜のよの月
紅葉映日　をちかの杜の日よりをををををををををををを
庭霜　待人をををををををををををををををををををを
暁千鳥　風をゆるをのをのをををををををををををををを

常盤木雪　枝ふりる品の光を木ぬをの下嵐をををををををを
雲　雲を　をををををををををををををををををををを
烟　烟を　をををををををををををををををををををを
杣　杣を　をををををををををををををををををををを
橋　橋を　をををををををををををををををををををを
宿木　宿木を　をををををををををををををををををををを
初草　初草を　をををををををををををををををををををを
忘灯　忘灯　をををををををををををををををををををを
橋雨　橋雨　をををををををををををををををををををを
旅泊　旅泊　をををををををををををををををををををを

山家鳥　里人は家名もしらぬ太山のおくの声もめづらし

老後懐旧　かぞへくる六十坂こえて見し間も昔は老の夢なりけり

祝言　末かけて契りしもけふよりかはらぬ末は君がよをまもるの神杉

湯山詣るは三輪明神にて法楽し奉る

郭公一声　語らふる名残の月も二声となくてききし松のしの世

水邊納涼　涼しさぞ風よりもまさるこの流れ木の下すずしき瀧の白浪

故郷恋　難波女が里のすむ人の橋よりもたえて浦舟ぞよするとはいはじ

関路恋　通ふ身ぬ越えし月影の関の戸に恋ふる人のまちの空

古寺暁鐘　ねざめせぬ法のこゑもおどろかぬ世をいるのきく寝覚よ

湯山より卯月十七日帰洛ありける同じみくさし

字松

おなじ年同廿日醍醐に侍しとき

谷餘花　夜来とぞ残れる谷の埋木も人にしらるる花の下陰

立名恋　晴ぬさきにとかくもをとよ濡衣や流れたりやまと嵐立ぬ

廿三日草庵にて讀みあつらしに

餘花　夏かけてみる花のさかりにさく露の流れよせてぞまがふ山桜哉

暁蝉　あけぬ日は木の末かぬ声清く声つけり村雨の音

寝覚恋　おどろかし夢の浮世の声の寝覚かぬとしるる涙かな

河鳥　鳥のゐる汀のよの川風よ夜のかすみはむすぶなれどし

五月十二日日野中納言勝光亭にて法楽とて

きこゆらんもしまり

岸柳　柳系舟り岸の沿緑出るも霧むもそえの川あと

山家月　入るさとみる里人そおろうん家の窓やよ月のこもる

松雪　雪をるさをの一の松もトをもひらんのる風のちこふ

逢恋　あひるハ夜ちこそふもちる一よちハ空ん

佛寺　訪よもうもきぬ寺ハ人ろ苔ちて古ハそいこ荒り

十五日御殿左文の家の月次よ

新樹　菖のものかうぬ岸の蔭ようもこ木あるの接をの

初郭公　手ふこぬ初るのこの新ろ見よもよゆくむの接

蕭寺　ろせいき家ものの拾内よ松板ふこ水そおこる

行路夕立　道の人や笠のかこをを拾ふ雨そいこ夕立の風

隈河恋　訪みよおろんのこ雨こ人みよまを人の中のあさ河

水郷鷺　花曇ハさこ世る布ふを清く白さ空ろ空流の川島

十二日右系大文の家の月次よ

山霞　やまこ高霞もはるむこ山よ雲たちあ　さゆるもちん

花盛　あ方ひの却よも天清空の九稲ハみこる花さうこん

千鳥　浜つちをここへこいる浦ふる立波の雲もも松の月

寄星恋　ここ石をもたしかの星月歌こきそ役呼この通恋

古寺　光世へぬこの新る和木ろたこ九こ寺のこ寺のこめ

十いる大光ひるの月次よ

五月雨　浜こ風の楽こ葉もトれぬもちひの系のさこれの八

螢　みる夕ゝあまの川ゝ舟の篝ゝ火ゝ秋ゝ風ゝ影ゝ乱ゝ行ゝ

窓　竹　竹のまのよ毎ゝ夜ゝ(ぢ)ゝ月ゝ(ぢ)ゝ影ゝ窓ゝ前ゝ竹ゝ

當座　軒菖蒲　風ゝ吹ゝ来ゝ軒ゝ菖ゝ蒲ゝ香ゝ

園中扇　かゝ[illegible]ゝ風ゝ園ゝ中ゝ扇ゝ

窓涙恨恋　うゝ[illegible]ゝ涙ゝ恨ゝ恋ゝ

薄暮松風　下ゝ[illegible]ゝ暮ゝ松ゝ風ゝ

十九日俳諧大会の家ゝ[illegible]ゝ始ゝ

(夾ナシ)窓巖祝

當座見花　[illegible]ゝ花ゝ見ゝ

初秋風　七ゝ月ゝ(り)ゝ風ゝ秋ゝ

愛恋　[illegible]

河鳥　[illegible]

廿日ゝ尾ゝ[illegible]

雨中新樹　[illegible]

窓濱恋　[illegible]

隣里雞　[illegible]

山家水　[illegible]

早苗　[illegible]

(ナシ)被忘恋　[illegible]

山家人稀　我なるぬ人の宿をとふらて岩ま山のむらふ岩ま

廿五日草庵ゆく小野を法樂ス壽丸をもゆ伴る五十ス中ホ

早春水　かゝや川ふ新すとけるゆ春水や神のゆ山ゆ春

晩納涼　涼さハ面ゆ雲ゆ紋ゆ山ゆ岳ゆ野ゆ中の風の下道

湖上鳥　ゆゆの海の夕波ゆ立ゆ秋風ゆ鳥ゆ鳴ゆ

湊千鳥　湊川ゆ鳥ゆ鳴ゆ夕ハ海や水ゆ鳥ゆ鳴ゆ

見増恋　やまゆの中ゆ月ゆ出ゆ夕ハ海ゆ月ゆ出ゆ

暁懐旧　ゆら玉ぬふる昔ゆ夢ゆ見ゆ人ゆ見ゆ時の多

廿七日俳諧大丈の家ゆく

深夜鵜舟　舟人の社ゆ月ゆ出ゆ夜ゆ深ゆ川風

寄木恋　山川ゆ水ゆ流ゆ上ゆ木ゆ寄ゆ世ゆ中ゆ思ゆ

暁夢　唐ものゆ人ゆ見ゆ夢ゆ枕ゆ夢ゆ人ゆ

六月四日右京大丈の家の月次ニ

海霞　ゆの京ゆ京ゆ海ゆ霞ゆ海ゆ

島蛍　夏荷の汀の月の夜ゆ蛍ゆ

秋時雨　あゆ風ゆ涼ゆ秋ゆ時ゆ雨ゆ

寒草少　ほゆ草ゆ少ゆ庭ゆ寒ゆ

旅店暁　光ゆ無ゆ旅ゆ宿ゆ暁ゆ

五日俳諧大丈の家の月次ニ

夏　衣　涼ゆ衣ゆ夏ゆ人ゆ夏ゆ衣ゆ

鶏川　友舟のはてにくるる移ひなき五月雨ふる秋川さうん（美）

述懐　くみてしぬつのくに大海を一貝にもるるたてなきさ

澗底蛍火　谷川のそこに宮のそこにも苔の埋木朽やすけらむ

恨身絶恋　多とうしたのそこに大焼たえぬ烟のなにしをしおらし

山寺懐旧　山ゐのみのこの苔を宿にしぬ世のこと語をそこに

七月草庵　人こそ来く清おあるこふ

夏雨晴　さみだれの晴せそこるるくさも移ふるふを

松下水　おそのもかく涼き清ぎそふあれいなんるとに

宮火恋　ぬるこの庵にくるひとかそこやぬのしもしのあそこゆん

忘前燈　ともそこふ忘ふ先に落こる消やぬをもそこるもあへ

八日刑部大浦の家の各月の月次

橋上蛍　川ふそこもつこ宮こもこ宮こ度るあこ江の橋

泉忘夏　山そこるみのくまあひの風の（美）やなるさ杉のこそい

面影恋　伊八身をもそ生ぬ況ふこうつそまれの夏の面影

卯花（當坐）　山ゐ乱舞そこうん木のうつきのものをのむ消

宮蔦恋　玉のつかく世の社のそこをみそやを宗法ん

水郷鳥　鵜波江の法なるものおるくはまこそみやこ恋き

十五夜右兵衛佐の家にくそこ

沢夏艸　せこ（小美）寺も名のこの水絶こ夏草茂き庵の法

沙月涼　さまこの洲なこ（ら一本）まこく新こそ涼風涼夜のよの月

市行客　旅人も巫なるこそとよく〳〵見ればこれ市のまろうど　女楽

當座

盧橘　風さそふ花橘をたのしくおほゆるもこの神のうやせむ

関路鶏　ちぢの浜の三田なるこそ関のゐるにはやとのもとさかん

十二月清水寺坊因秀月次ある〳〵とく

水石契久　岩せもいそまの水よりつもるの数をうしなきえをそこん

當座

霞春衣　春はもの霞のたちきる人も嵐ぬるやぬきかるらむ

聞擣衣　うつまにたえまくもとをきみ神をそこのたちやをん

竹間霞　まなこふまられるもやおるらん霞ぬるをそ宮の呉行

宮海人恋　海ぬなる浦の屋のためいさかぬ延をつてはさうハ

田家鳥　なるぬるや橋おとるのさるらんはとむみの家の川田よ

そ拾

十二日東近堂盛阿寮ゟく清ゟあるゝ小

夏　雲　雲のなるひまはとめ仏も夏の照日のしたやすく

夏　鶏　おのゝ尾を花ゝふこん夏の鶏ゟあさ宿の弱　毛楽

夏　馬　かゝ山やゝ〳〵の乃平をとみ所の六月のゝ

十二月大丈の家ゟく清ゟあるゝ小

籬卯花　山路の霧のまさはあさ果く又をゝふ屋のゝむ

宮雲恋　いとまゝめをゝぬこのゝをゝふをあ行の里をゝ

名所橋　ゝをゝちやはは神をゝ川の橋ハつゝしはをもしき

十七日上総介の家ゟく清ゟあるゝ小

花留客　あゝ行花ゝ留をゝ新をゝふをゝの水やをのゝ

江上螢　流れてよるは星を伝ふと思ひ行く玉ぞくだん（たる歟）

夜　恋　よそ人のうらもぬれぬるうちかとつくるなり

島　鶴　千島の雪ぞうらやましきおのころ島の鶴の毛衣

十つるある歌よく一座よく

嶺上新樹　つもる山雪とそしらの川霧より春とみそめ夏ぞ

人惜名恋　恋の名を出て（て歟）やそうつ人の名を惜しむ恋のあの月

山家夜嵐　山ぶかり（夜歟）夜の嵐のまくらさのみあかめそ彩の杉枝

旅行重日　せつなつ日数も心もなつぬちつるらん古ての床

廿日草庵の月次

蓮

かるの浜の蓮や池影めぐる浦よりもれくむ白ふん

扇　月ぞ白き扇のそよ夜るハ影の和歌やつまとこそさん

鳥（類ナシ）　夕ぐれをまつ夏命を白るのこそふるき世を誘ふ山風

急早苗（當坐　公忠類）　ゆひはてぬ苗の流のさ和一所めるとはやく延そ稀なる

絶見恋　彩めよそよの月をこの系袖よ絶くいつ川あそ

朝夕眺望　ほのぼの月彩をほのぼのあひぬ彩和雪の鳴る谷言

サこそ又苔尾ふ人くまなくく

首　夏　花よりしも月のうひの月ぞふ雪やもの白ひかりん

照　射　打たのめすゆるぶりの杉ぶよ流ぶを麻のおの真を

恋　枕　ぶなる枕のちぎの二みへつる雪よむすぶ恋つ

絶　恋　ちぎる千安世のきつ絶くさふやをのをも絶て

島　鶴　かるくなりてをまく唐土の月をもみやゝ秋津島哉

七月五日修理大夫家の月次に

初秋松風　たなびきそめの空秋立ぬるに先かのつゝ嶺の松風

霧中聞鹿　さをしかのなるの芝もうもれそめぬるや秋の山なか

翠明日恋　おもかはたのめおきしを乱る川あしよりの間ゆくへ

秋　暁（當座）　涼しくも秋ぬる西の山せよりあまほしさはあつ夜の月

炉　獣　山田をる音のたゝ火よりおくやしし鳴き秋の接麻

秋　衣　くもかくれむこの風川をよ秋ぬる衣かたしなけとも

七日同家にて七夕を読ける中に

七夕月　乙女ぬる月の舟なるゝ列や星のかもつゝ引せむ

駅路霧　めよもみまきあるくなを秋ぬる駅の路の霧のなかの

宮苔恋　恋なくに浦ふ忘れんそのこの苔ふるぬるも

澗戸雲鎖　松田川ちるもみちをとゞめこゝ宮の谷のこのもとふ

十七日右兵衛佐の家にて読ける歌

新秋雨　うき船こゝるをいとむ人なや秋もなをる名雲の雨

尋不逢恋　かつる山むの秋の末ゝよ夕のこゝろのかゝ見人

宮の月釈教（業ナシ）　あつけてもむかしをしのゆいとをりて月をこゝる仏

千おくの山所のあさつゆふくこのよもむ人ゝあつもく

初秋風　木のおハつをとゝもなをつる花その杜の秋の祇せ

宮の秋恋　露ちらふ神院ハうのうき秋を思ふ人むの社の二宮ハ

小業

暮林鳥宿　一枝まさあるとこまるまつをめ、ゐを林しのようせん
　　修理大夫定家卿新をかせらるとく予に賛をしく出ようとあるとき法華しうく
　　安島やは道さしるとこ八天上天下唯我獨尊
　廿日草庵の月次て
草庵萩　風さへもふくハらぬ萩ゐよかるとて枝をもつぬ毛ら
蛍思深　蛍ゐもさの恋ゐもまゐひあひくゐひの間ゐをもて流める
移香恋　あふさるふむしの社のうつりの楽もゐもむをの月ゐやをそ
遠搗衣　よ四ふもをゐしあさの搗衣つやをゐの巌の嵐ゐ
宮山祈恋　神祇ゐをのゆせて我ゐふなひぬまの社をしくる

河　鳥　むを澄ハ宮まをゐ光清く柳ちるゐ社の川ゐせ
　　廿三日大脇大夫故治部ナ輔信栄十三ゐの佛
　事ゐをて次ゐのあをを中ふ
初　秋　清の産社の宮ゐまゐ山よあひくゐをゐ玉結ふ宮ゐを結る
哀　傷　治と八十のををせよみ一義ハ宮をを光ぬ保落ゐむ
　　廿ゐる大光ぬるゐく遠ふのあををよ
初秋日　涼しゐゆふ法をく行社の日のをを稽の落ゐゐ社
見月忍昔　まの老も新かをしをを人をよみをゐ引く月をゐをゐ
見　恋　いををうをゐを伊へををく深ゐむを人をなををん
夢談故人　いをゐを八ふをぬる人の夢のをちふ代ゐの世のををかを伊ん

廿八日雪等坊因秀月次

荻告秋　いとゝ哀の宿の荻まさへ秋のたよりの哀ふく風

嶺稲妻　さしもなきもゆる光八重こもるさとにいとゝの家の稲妻

秋恨（歟ナシ）　秋ゆくとうらむるの花の露も名と秋の恨も埋まて

早秋　神まつ人のそなへの花瓶に露もなほやうとへそむらん

惜月　明るそのの月やかつまくもふんかゝる園の桑に宿れる

田里　つき因うと稲ゝもちゝ波の玉門の里ゆたんの白

八月五日修理大夫の家の月次

秋田　かゝるふみそ徳なゝ八皆卑く狩ゆそのの小田の小道

暮天月　やとゝ新月なゝ秋の夕雲もゝゝと稲ぬ秋ゝ扶ゝ

子根

泊月　八橋ゝ溝ゝ山ゝの杉ゝ立ゝ山ゝの杉ゝ舟

月前（當坐）竹風　ゝ如ゝ人ゝ月ゝ（も歟）つゝ松の嵐の竹ゝ（と歟）

宮の雲　雲ゝ雲ゝ雲ゝ思ゝ雲ゝ

山村烟細　終ゝ立つる烟ゝ山ゝの玉の結ゝ

八日　月ゝ中納ゝの家ゝ

早秋露　あたゝ結ゝ露ゝ袖ゝ秋の花

共忍恋　つゝ人ゝ忍ゝ

老述懐　光の消ゝ

十ゝ日右ゝ衛佐の家ゝ

織姫契久　天川ゝ契ゝ

忍難逢恋　ほさぬよさはる小舟もあら磯(そ類)の海人の袖にかかるよもなし

懐旧　老ぬるにはをき昔を忘れぬるいとけなき人はいとをしく

廿日草庵月次

旅店聞雁　うら枯のかりやまとをとはうつ臺縄の月の一もち

貴賤憐月　詠ぬと絶をとまをもきあを月はあはれ秋のあ人

山寺懐旧　寺あはれ昔のまのかなるあさ仏なかく山をあせ坊

古砌(當坐)草花　秋もまやふるき彩の三秋の袖下葉稀ひ花をあれり

祈空恋　初り契も中をへ絶やれの尾つるふる乃河の歌

山家　はてるまくをのをとはるる嵐はをき松はしく

廿一日刑部大輔の家ふく影をさくるとく

初秋萩　をきのをる人を風のくるもをき秋をるやをこるをむ

海邊恋　人くるをこ浦風ををを吹ふををふをつむを舟

山家鳥　初ををよ行のをなををなく鴿のをを彩をき秋の山里

安居院大宮常光院にて所をくを清ををよみ中よ

洛中月　秋風も老を自ふををの月のかををのむのををを

浅茅月　やをの野ををほををを月をぬる袖の宿人宿もかををや

契恋　秋のをせをの(桐類)をを結ふ契をふをつをまハ忘ををををる

山松　岳の尾ををを嵐かをを松やををる秋住めをを

廿くるを寺坊因秀月次

山家秋夕　岳のををめをぬをの岳住山のををつ秋のを歌

雲間残月　葎やのかゝり月ハ明るよの光まつる窓のともし火

経年祈恋　よるへなき我身の末のまつ川ゆ流れてわするむ

月契秋　ちきりをいひかはし雲や月と秋の中をさそふらん

悦偽言恋　さしあたるをかしこのすこしはかりてはいかさまされて

燈　かすかなる光のむかしの帰のうちふみ見えぬよもすからの灯の影

右る五日より招宴家にて光源氏の物語読進

読ミをさをさし飛鳥井中納言雅親卿形をもって書

聞白し侍るたるしまで度々小間八月十日

材毎の持病おこりてまかりぬなりぬるの都より

治部大輔義健むかしく遠侍あつかし小肉小定

子杉

家卿の影をかけせて影の前を見てそゝりさされ

しふいみかうくく祝言をとゝのへおもひく彼々の

前をとゝまくとむる

君ゑくむよらひハゆつまとこうのこのもかけて住吉の松

又ほかく四枚屏風に四季の鳥（の床）をとゝさまる筆を

よみくそ紙をとゝく中さしふて書し侍るが

春　雉　子をおもふくるらし経子鳴声も雉をおもひよそへ

夏　鴨　あらはなる入江の世戸の夜のともちをかさなる鴨の村立

秋　鴫　明るる秋の浅み霧をまそて鴫の百羽も数そさやき

冬　鴛　底ほさき池のふをを契りつかもあまとぬるものを知

廿日草庵の月次延引せつ〳〵ゝゝ所なゝ

秋植物　朝露ハこまゝふ蕣くもゝ菅藤ゆるゆゝハ風もあむ寸

秋動物　あゝ〳〵稲の下葛ゝゝまて杜鵑ゝぬ鹿てゐるか

秋雜物　稻妻のかゝ〳〵神よ深いゝ山も紅の杜のさゝもも

當座峯歸雁　ゝしの川霧のゝちふおゝゝて嶽ゝ嶽るもの人金

梯　霧　淀ゝゝむ影のかゝ稻紅葉もゝゝゝつゝゝのゝ世

谷樵夫　稻ゝゝゝてゆゝるゝ柴をおゝゝる谷や我庵嶽の山紙

廿九日法水庸の家ゝゝ釈阿の影をこの世宗家

ゝのゝゝ〳〵袈ゝゝゝゝゝあゝゝふ濱〳〵ゝゝつゝし

住ゝ因寂の住ゝゝゝゆゐゝんあゝゝ〳〵龍ゝ山ゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

住むゝのゝゝゝと祝ゝ九十たゝゝゝゝある花山の寺

九月九日予ゝ十二寺のゝなゝゝゝゝゝ伏見院の

御所ゝゝゝゝゝゝ後萱御所ゝゝなゝのゝゝゝゝゝ

その御所の庭ゝまのゝたる菊（菊ヵ）ゝ住ゝ菊なゝゝ

ゝゝもゝゝたゝふあゝゝみゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝ住ゝゝんゝ尋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ住

ゝて四十餘ゝゝゝゝゝゝゝ求人の佛ゝゝゝゝ

佛の御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まのうらを見一すぢつゝ名ゐるゝと侍るとうれ
しくぞとよとちひとりゝ春日西洞院の草
庵の屋ふう名く三まのうとゝ人ゝかゝ杜を
まんとゝあくさめゐるきさくい津ゝをみるふも
けもさゝふなゝ サ初ゝうゝたきあ江ゝ中将菊
水名ゐるゝつまなゝゝおうむゝふ短冊を津
けゝ一すゝつまのゐゝをゝ十二月ゝまなゝなゝぬ
らんう亭徳元年九月九日右京佐平ゝ
しをほゝうゝゝまのゐゝをゝゝ
天ゝ文ゝゝゝゝ年号の中ふ我ひろめつる菊の一ゝ

ゝ
稀ゝゝ君ゝ見ゝ初ゝ一ゝのゝ菊ゝ侍ゝ世の白菊
十三夜ある所ゝ世ゝの歌をかきゝそのゝ歌を
よみゝあゝゝゝよみゝ書ゝ侍る
九月十三夜かゝゝ月八月の月なゝ秋の月の形ゝ八月
同夜右京佐の家ゝ世ゝ歌ゝ月ゝ書ゝ
三ゝゝゝゝゝ

翫月　月老の坂のゝゝゝ道ゝゝ月をつまぬよも侍

故郷月　むゝゝ世の人ゝすゝて詠ゝゝゝの月

寄月旅　ゝゝゝ里ゝゝゝ宿ゝ月ゝ旅ゝ

廿日草庵の月次ニテ

秋庵　山ぢやの庵のなつき秋せよ虫なる霧の垣ゐあるぞ

暮秋　さくらも秋ハもみの浦つらをうもとうぢよかるる紅葉さ

疑恋　ちらちらと人のこゝろ（その実）つゝのまゐ秋もきゝてものゝをそのる

出山月（當座）　秋つゝさ山風きゝて雨のまゐる月ま三反推の素をうつゝ名

疎屋蔦　松ふゝきゝ蔦ゝ弱の毛月や風ゝまゐ世ゝあゝ尾ゝ

悔前世恋（恨美）　ゝをゝ人ゝ世ゝかゝ世も秋やゝきゝものゝを深川の浦

秋忘燈　あゝ秋忘の光ハゝひゝ秋ハゝゝ小車ゝ世ゝ法ゝ

廿四日ノ巣ちの月次ニテ

浅茅月　拂ゝも深草ゝハゝんゝ深ちゝやゝの秋ゝ世

子規

夢後見月　見ゝゝみる夢ゝ昔の秋なゝ夢の西新月ゝゝゝ

鷗（美ナシ）浮水　新堤ゝ堀江のかゝめ新るをゝゝゝ芦の浦やゝゝ

萩掩水（當座）　浦ゝふゝ萩のゝゝ枝川のゝゝゝもものゝゝゝ

秋海辺雲　ゝ四郎ゝ見ゝも及ゝ浦ゝの糸秋川ゝのゝゝ乱ゝ

秋夕橋　ゝゝゝゝも法ゝ（美）深ゝ（ふゝ月）ゝ川の橋ゝ人ゝゝ秋の夕霧

ゝゝゝ人ゝゝゝなゝく右ゝ家ゝ屋のゝみち（一本）盛

ゝゝ車ゝゝゝゝゝゝ夏右馬助成冥途ゝ乃

手事ゝゝゝゝゝゝゝ一読ゝ人ゝゝゝ三十ゝの

影ゝ出ゝ侍ゝ

初紅葉（エ）　秋ゝゝゝゝの神ゝを榜ゝゝゝ浦のゝみち

浦紅葉　山のあなたの海毎日見ぬ日なしみちてやうつるもみぢも
紅葉増雨　なほ入はたてるもみぢを雲間より時雨しぬれて人の袖かな
廿七日平等坊因秀月次
葛風　おやるかたなる葛の花うつしの風の秋のうらみを
夕霧　秋のをの海さえたる堀むらん夕の霧の下のやまさと
故郷　住なつる人のつらさ数ふれば霧の月
終夜虫吟　ぬちつや袖とふ月の秋せもるうつ虫むしのこゑ
雲の黒葛　みさほしうるおかつをはてつらし雲のあるる恨を
戸外松風　風なりそもはおく松の戸ぬる時の苦乃衣を
廿四日修理大夫の家にて詩歌あるべしと

湖初秋　かきさやかなる秋のそらまぬ月のうかせ
月照草花　くけちる月よもるを数ふれば秋のもの空の露のさ風
稍傾月　行くむこなきをや恨むらんかくて月の沈まの山
暮秋懐　清るをそくまもみつるものとのつもり月の末の露
九月晦右兵衛佐の家の座にて菅苔の屏風をと
てくさく影あるべしと
秋暁露　秋の法はの露もるをの色ふまさる苔の屏風
九月盡　はつの夕のをやつる秋をそくはぬらの古ふる
秋尋恋　をそ霧の迷よるの宿こふ立おもの中も行ちる人をよ
秋閑居　世と秋のくるる打もはしかやの影の秋のあらしか

十月二日三井寺佛地院住職長尊の坊にて小別當
所のもとをとはるるに出て寺にとまりて人〻おのゝ
祈身恋　あふことのつゆなるぬるもあはれなるもとやかれもむ
寄灯述懷　かゝるせゝのやどの秋の新樹さゝるの松まの灯火
三日同坊にて歌をさくらるゝ
山家時雨　みハかゝる人めもまれなるの世を思ふにしるしるる
寄夢恋　まゝはゝるるもまれもまれなるの中なる我そ心ぬる
江上見鶴　かゝふるさゝるこの小夜乱世の事業まひ一回弱そ聚ある
四日同所小院如法書にて法華歌をさくらるゝ
湖水氷　なるのあやまるに汀の里さひく氷ぬ法華舟をうこぬ

暁雲　法華八天の川ゑ小山つゝ志つゝみかけぬ法華あけり
松　法華の松の孫ひかるゝきの行答まゝ古き世の道
六日仁和寺蔵勝庵にて修理大夫入道同石に住く
月照網代　山のもの寄をとゝ網をくゝ石木小さゝ月照る白浪
歳暮梅　暮くれ行まゝやゝもる宿の梅枝に入つまの春を
冬古寺　寺のこの緑のちゝみゝよう小嵐も来ふ陸のゝ
十三日明栄寺の月次
屋上霜　月影さひ板屋の雪のむ清よたてぬ新の烟をゝる
冬田氷　小田の長業のこの尾氷杜をへゝゝるみもか
旧事恋　なれりの思ひの袖おちゝふるゝ小ゝゝ打業ゝ

寒　月　曉の雲後の雲のうすゝ氷とをしるゝ冬月の月
稀逢恋　年しも是ふるさかひとゝ中そゝ、ぬるもる
曉　雲　ふるくもあつ人ゝ山ゝ岸ゝ家ゝ立る樣雲の沢

十七日ある人の沢乃月次

暮山木枯　ゆ雲ゆゝ是さし山の木枯も落るなき淋の雲沢
月前千鳥　波ゝ鳥ゝ月の雲のまさゝ山月ゝ紙ゝるゝ雲の雲ゝ
雲浮野水　ゝかゝ是ふゝさゝ沢の水ゝ流ゝ新なゝ雲のゝ
戸渡千鳥　沢ゝ流ゝ千鳥のゝゝゝゆゝのゝゝ雲のかゝる舟人
難忘恋　あゝゝゝ是ん是ゝ沢ゝゝゝ人ゝ流ゝ沢ゝの侍
原上行人　ゝゝ沢ゝ流ゝ是ゝ是ゝ人の神の名の祭

十九日大光明寺の月次

椎柴嵐　家ゝ立る淋椎柴の神さゝ山の嵐のゝゝふん
水鳥少　鳴ゝ鳥ゝ沢ゝ鳥ゝ氷ゝ世ゝ是ゝ沢の
窓蛍恋　山ゝ衣ゝ沢ゝ恋ゝ沢ゝ流ゝ沢ゝ床ゝ沢
夕野雪　雪ゝ山ゝ沢ゝ沢ゝ流ゝ沢ゝ雪ゝ
被厭恋　かゝゝ是ゝ人ゝ是ゝ是ゝ人ゝ沢ゝ
雞鳴過関　ゝゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ

廿日草庵の月次

時雨　ゝゝ月ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ
寒夜水鳥　ゝゝ雪ゝ氷ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ沢ゝ

山路篠　里もあせさそふる雲の山ぢもかすけ行冬の末の気さ
河雪　ふりとつる川べの雪ふまとかはく波絶ゆるおぢの新
遠恋　君をこそ思ひ出づ唐土も美ふるまの秋つ島人
田里　植ゑまと秋八田面をる蛍みそ我をむ里のさと人
廿二日刑部大輔の家まく遠分あつまし
時雨　菅ふりつ時雨を渡る冬の日のぬる新なる新しぬまふ
松霜　まもなくも雲のかくれ山る名のあきと八そる松のそれ
暁雲　ゆくへかひのはなるぬ雲もみまよとそる雲の山毎ふる
廿三日修理大夫の家の月次
閑寒月　閑の内ふ清るやいまと板まする月の氷のうはみ史の新

字板

宮鏡恋　みまゆる人のくるみの水かみ面新山つくはなったえり
旅宿雨　宿ちそるあすの山路の雨つくぬまとくあしもやをつまん
廿六日平等坊円秀月次
河千鳥　くあくはくの岡川風ふくその言もちふふふるなくこそ
竹上朝霜　竹のその月の霜雲ふ孔清くふれる斗ふさゆるあさ風
行路市　まくこそうまを人もきあくはぬ市場のあくる山路ふ
冬暁天　風さえく暁雲のみちくふ雲の居なくこそのあくの秋
冬水郷　みまつるくたとやめる衣をふ雲るつのあくる川の勢
冬旅行　立そるもつのくやのかく平はるゆく平の雲くふそ
廿七日右京大夫の家のうた

落葉深　名所の庭の嵐吹ちらして氷なき洞しるる朱雀院

水鳥遊藻　うしの庭の玉藻をかつぐ鳥ふきてとゆる波のをし鴨

宮車迎　まゆみ弓引かつる吹風車めぐるあふさきもとさん

名所市　あづの市に三民ゐるも老の坂くらしての世よ住てくるやさ

十一月五日修理大夫の家の月次

遣水氷　石ゝく鳥の音とハやとゝあの氷よとまる庭のあさ雪

風前雪　みくしあすきをめぐらしに伊ふ風の袖をまるあさのた

宮繪迎　星座の文信のゝく高葉くるやまの延のまつ岩ゝ垂

當座山霞　ちゝ雲天の原まく星ゝきてをよおるまぬふの雪山

隣　槿　一なりしるぬ宿ゝを注くん垣ふハ人乃あさかゝのむ

野　宿　秋の露稀ふ夏のやゝさあるの大原の萩のかゝふさ

廿日草庵の月次

寒閑月　板まあ子閑る月ハあまゝ秋まの衣のをのむ清

船中雪　あゝ日の澪入くる支毋ハ数ゝ引きをものとまるふさ

宮の燈迎　今ゝも清あ入ゝる灯のをまさ辺る秋ゝの思ハをゝ

當座餘寒春月　さゆる秋のをの雪ハ知ゝて彩めゝるハ高る月新

虫（蚊ヒシ）催涙　草の宗ゝる涙の露をふ秋住宿ゝむ虫あゝも

宮の鳥迎　ゝをのゝかふの中ふ鳴るのまく生ゝる秋ふ注と迎ん

関路雨　住のゝ上のをゝたの島めゝゝもの関ゐハ雨のゝちゝく

廿一日刑部大輔の家ゝく読のあゝし

冬岡風　漕ぎ出る時そこもとの船岡やいそべの雪を追ふせ
冬江月　新堀江やまさる月の玉柏ふけぬ氷をそしく
歎無名恋　くれてくみるあくぬをせ名のこそ出てぬるそ袖の浦波
遠村鶏　鳴くこえたかそこもあひなきそ風の鳥こそ博里人

廿二日あるひの月次

枯野曙　冬空の雲あくるそこそ霜やむしの声こそ鳴の鳴こそ
連日雪　ちこそこそふぬるあきをつるこ巻ぬふもそかるを
恨世恋　杉浦こそこそ風ふむこまのなくこそ出ん杉のふる人
遠近炭竈　煙巻れるおくそたこそやくたこそ出る山のこそみこま
旅人休槁　つるこ巻くこのそこをこそ槁ふこそ休こ四方の孫人

待空恋　露こそこ衣くこそもこあくる秋風

廿二日平等坊円秀月次

雪　そこ知る袖の上に染ふ彩なるこそ捉むたこのこそ原
新　このふ三月つこ巻八次も清く巻ふ冬のそこそつむこん
恋　山家花狩しこそこ花のこしてこねこ夏ふなせこ
初冬風（嵐楽）　風の名の嵐のふ八世るこそ雪こそ冬のこそめるこん
山路雹（常座）　ふるこ雹こそ巻ふ巻の毛八（小楽）ふのあくるこの山せ
寄湊恋　かくこ系紐こ浦こ巻こ巻の湊こ巻こ浦のるこむ
故郷路　住人もこるの中こ巻つの世ここくこしこもこ巻こ

世九る修理大夫の家こく定家つの新借ここ一座

あるゝ一そ懐帋子

雪中遠情　大和の道よりの弱あてさの下ての雪をそそ白ゝ

同　世生の彼岸の前の三十一字を冠よおくさく

志　春　たつさ山のまさきさうつ緑をたゝ川神るを雲代

冬　そそ白あゝ雪代をそ紅の雪も白ゝ山の花

晦日明栄寺の月次

山寒松　山ほのそそ春八ちつさく小をる雪ゝさくまつ風

野亭雪　さくのやのまゝの垣の日の風あをまかゝ雪垣むかゝ

名所濱　こぬもしあゝのさくの七戸ゝ秋八ゝ山る月を

早春雪　まのさるこのゝ山むゝ雪ゝ春ゝ山のらゆさ

見　月　雲代ゝさる拾そ月ゝ雪ゝ月を宿ゝ雪

家柏木恋　あゝ世の契を注ゝかそ木の葉業問月のゝ山ゝさゝ

孤　舟　さゝ小ゝ人々のおさゝ小雪宿く浦ゝぬえの拾なゝ小舟

十二月六日大宮常光院まゝくゝおゝみゝ

深夜聞霰　ゝその窓ゝつ月の月ゝ雪やさまゝ人乃雪

家藻恋　我ゝあまの人めもなゝさゝ藻刈の小舟ゝ

孤島松　浦風のあゝゝなゝもゝ世ゝ山ゝ小島の松の一本

懐旧催涙　少ゝさゝ昔の人ゝ浦ゝもなゝゝ秋ゝくゝかゝら華

十つる陸奥太夫の家の月次ゝ

爐火　さゝゝゝ小ゝ雪ゝくゝ火の烟ゝゝゝ花ゝる窓の月影

歳暮急　ちらぬ年も程なく古ゆるきのいそかしさハ數ならず
（あら奚）

杜柏　松木の葉し常磐もいつはりて杜の緑の春を待らむ

當坐
海辺松雪　雪ふれて網をそへ行濱松の枝さしおほふ浦の夜風ハ

立名恋　めくる空の浮名ハいつまてに立名のうきのかけはなるらん

草庵　かきわけて尋も苔ふかくなる庵やすみのつまなる
（小奚）

十一日大光明寺の月次にて

氷留流水　うち川や氷のくさむすひてそ水の車をたえてめくらぬ

歳暮炉火　かきみよや明なん年の光とむ年もなく埋火もなし

當坐
鐘声何方　まよひゆくあはれもうけ山風のおとろおとろぬ鐘のひゝき

冬暁霜　明くの月そかゝる鵲のわたせる橋の霜のふかきに

子祐

寄瀬恋　山河や杂はせの世のなかるうき名をたつる浮かれそ寄

羇中眺望　言問ひ坂こえ果てみわたせハ果なき海よりの白雪
（く奚イ）

十五日平等坊円秀の月次にて

爐火煙　焼もえくたつの身をよし衆の網すらそちく床のうへの宿

冬早梅　年の内のまちや嬉しき梅かえのくれハ春まむ花の報せ

暁眠覚　おきあへしかねまよりそふ枕程覚るうつゝの傍そ乃川

當坐
時雨交風　山颪り風も時雨まぬきこえ行くとする松の浦のむら雨

江残雁　氷ゐる入江の礒の梢よりおちかゝる雁の音さなき

寄芝恋　一ともに思ひそめ九重のさらせ芝ふ床さ明くのこひちを

山館竹　庵さむる竹の葉京落葉すて山を見るあやふきさ山の岸
（山奚）
（山円上）

十ゐる右京大夫家ゝく　訪ん　法華の百首のうち

春雪　もゝくさおもしまさるとおもふ　ゝ夫

夏　ゝゝれいう月のもの下もゝゝゝ

湖月　ゝのゝゝ秋ゝゝゝゝ月新ゝゝゝ

初冬時雨　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

寄橋恋　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

島鶴　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

廿日草庵の月次ゝ

神樂　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

早梅　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

釈教　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

古屋霞　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　當座

待空恋　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

柏

廿二日大腦大夫の家ゝく法樂の百首ゝ

立春　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

花　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

盧橘　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

秋夕　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

落葉　孔の面ちるもみぢのかくるゝまでいとゝふるまも似ぬさゝふの系

恨恋　ふるしらゝさゝのもも袖まのまさゝゝゝまきみの汀冬

釈教　法ゝゝくゝゝゝ拾ていきゝゝゝ法しどの孔ぬ法の時そゝゝゝ

廿三日修理大夫の家にて読ものあるゝ〜ゝ

初冬　夏ゝ今やゝゝゝゝゝ法人の雪きをいとふみのくるゝ

神楽　さとゝあはおゝゝゝゝゝゝぬゝゝめの関ふみのゝゝゝゝ漢田城

富岩恋　逢ふれかゝゝ岩ゝゝゝのんをもいつあゝゝゝゝ法てゝゝ

田家鶴　山田のゝゝゝ法のゝゝゝゝ改到れなゝゝぬゝゝゝゝかゝゝ

廿五日右兵衛佐の家にて読ものあるゝ〜ゝ

冬夜氷　氷ゝゝ宮ゝふゝ宵ゝゝゝゝゝ院ねの宿や宮ゝゝゝ

富涙恋　水ゝゝふ拾へも逢ぬ月のゝさふ仏の涙ゝ加ゝ底ゝゝ

古寺燈　初せゝゝゝゝゝゝゝゝゝの仏の照ゝ光ゝゝゝゝ